東京地域におけるHIV/STD感染予防啓発の推進に関する研究(MASH東京)

東京地域におけるHIV/STD感染の予防介入-MASH東京の予防啓発活動について

佐藤未光(東京大学医科学研究所/MASH東京)、井戸田一郎(東京女子医科大学/MASH東京)
長谷川博史(MASH東京)、岡崎一裕(HIVと人権情報センター/MASH東京)、橋本哲志(エイズケアプロジェクト/MASH東京)、宮島謙介(成城墨岡クリニック/MASH東京)、土田大輔(東京慈恵医科大学/MASH東京)、橋本謙(都立北多摩高等学校/MASH東京)、鬼塚直樹(CAPS,UCSF)、木村博和(横浜市立大学医学部)、市川誠一(神奈川県立衛生短期大学)

研究要旨

MASH東京は新宿2丁目を中心とするゲイコミュニティに、広く浸透する予防活動を展開すべく、予防活動を対象(ターゲット)および手法で分類し、それぞれに併せたプログラム展開を計画している。平成13年度は昨年度に引き続き、予防相談員の育成、STD勉強会を行っているが、これはゲイコミュニティ全体をターゲットとした個人レベル、グループレベルのプログラムである。また新たにニュースレターの発行、ホームページを開設しており、これらはゲイコミュニティ全体をターゲットとした、コミュニティレベルのプログラムである。また啓発対象層をフォーカスしたものとして「商業用ハッテン場」(顧客同士が性行為を目的として利用する商業施設)を対象とした啓発プログラムを構築中である。平成13年度は新宿2丁目内でのこれらの活動を重視することにした。アウトリーチを行い、また色々な分野のキーパーソンの協力を得て、MASH東京の活動がコミュニティ全体に広く浸透していくことに工夫している。予防介入を進めていく上で、どのような情報をどのような方法で提供するかについて、さらに検討を重ね、実施していくことが必要である。

A.平成 13 年度の活動の概要

MASH 東京は新宿2丁目を中心とするゲイコミュニティに、広く浸透する予防活動を展開すべく、予防活動を対象(ターゲット)および手法で分類し、それぞれに合わせたプログラムの展開を計画している。前者はゲイコミュニティの多様性に合わせてターゲットを絞り込み、それぞれの特徴やニーズに合わせたプログラムを構築するものである。後者は手法に合わせてそのレベルをコミュニティレベル、グループレベル、個人レベルと分類し、それぞれのレベルに合わせた手法のプログラムを構築するものである(表 1)。

平成 13 年度は昨年度に引き続き、予防相談員の育成、STD 勉強会を行っているが、これはゲイコミュニティ全体をターゲットとした個人レベル、グループレベルのプログラムである。また新たにニュースレターの発行、ホームページの開設を行っており、これらはゲイコミュニティ全体をターゲットとした、コミュニティレベルのプログラムである。また啓発対象層をフォーカスしたものとして「商業用ハッテン場」(顧客同士が性行為を目的として利用する商業施設)を対象とした啓発プログラムを構築中である。平成 13 年度はこれらの活動がコミュニティに根ざしたものになるように、新宿2丁目内での活動を重視することにした。具体例は項目ごとに後述するが、各々のアウトリーチを行い、また色々な分野のキーパーソンの協力を頂き、MASH 東京の活動がコミュニティ全体に広く浸透していくことに工夫している。しかし、これらの活動はマンパワーを必要とするため、具体的にどのような情報をどのような方法で提供するのかについて十分に検討して実施していくことが、今後の効果的な予防活動の継続に必要である。また今年度は新宿保健所が主催で 12 月に行った「ゲイのための HIV/STD 検査」に協力した。行政と協働で予防活動を進める上での、足がかりとなるように、今後も意見交換をしていく予定である。

B.平成 13 年度の予防啓発活動

1)STD 勉強会改め「MASHROOM」の開催

平成12年6月から毎月第3日曜日に開催している。新宿2丁目のバー「K*O」さんにご協力を頂き、開催場所を提供していただいている。単なる STD 及び HIV に関する知識提供のみならず、ゲームやグループワークを中心にして STD や HIV、Safer Sex などについて参加者がお互いに語らい、経験や不安を共有しつつ Sexual Health について自然に語り合うことができる場を提供している(表1)。この方法によって、自己の Sex を振り返り、Safer Sex に対する自覚を促し、さらに予防行動を促すことを目的としている。また、自然に語り合うことができる場を通して、ゲイコミュニティにおいて HIV 感染者を受容する雰囲気を作ることも目的としている。今年度も昨年度に引き続き、ゲイコミュニティで知名度が高い人や NGO/CBO で

活躍されている人を毎回ゲストにお迎えしている。この試みは、ゲストに自己の体験をもとにした STD や HIV、Safer Sex についての話題を語っていただくことで、参加者が身近な問題として受け止めることを目的としている。

また今年度は以下の点について新たな試みがあった。

・コミュニティに密着した活動をするために、勉強会の宣伝に重点を置いた。9 月から毎回、新宿 2 丁目のバーやクラブを中心にビラとポスターを配布し、また週末には街頭でビラを配布している。

・「STD 勉強会」という名前はわかりやすくはあるが、堅苦しく専門的なイメージがあり、もっと身近に感じてもらうことから広めていくという意味合いから、9月より「MASHROOM」に改名している。

・9月から4つのテーマ「Safer Sex とコンドーム Part 1」「Safer Sex とコンドーム Part 2」「HIV について」「STD について」を1シリーズとして、シリーズを繰り返していくことにした。これにより参加者が1シリーズをこなすことにより、一通りの情報提供を受けることを可能にした(表 2)。

1 月 6 日にスタッフを対象とした「グループファシリテーション研修」を開催した。今後も定期的に行うことによりファシリテーション技術の向上に努める。

表 1 MASH 東京の予防プログラムの分類

		ターゲットとしての対象	
		ゲイコミュニティ全体	個別の啓発対象層
手法としての対象	コミュニティレベル	・ニュースレターの発行 ・ホームページの開設 ・コンドームプロモーションキャンペーン	・コンドームプロモーション(ハッテン場等)
	グループレベル	・STD 勉強会(MASHROOM)	・MASHROOMCAFÉ(若者対象) ・施設オーナー講習会
	個人レベル	・HIV/STD 感染予防相談 ・STD クリニック等の紹介	・HIV 受検者対象の予防相談

表 2 平成 13 年度に実施した STD 勉強会/MASHROOM

回数	月/日	形式	テーマ(内容)/ゲスト	参加人数
第 11 回	4/15	講義・実技	ナース・ネジのコンドーム講座(いろいろなコンドームの紹介説明・コンドームとSafer Sexの関係)/FM さん	20 人
第 12 回	5/20	寸劇・グループワーク	コンドームとの上手なつきあい方(寸劇の場面におけるコンドームネゴシエーションを考える・コミュニケーションの取り方)/M さん	23 人
第 13 回	6/17	ゲーム・グループワーク	行為別 STD 感染について(性行為別のリスクを考える・特に生のフェラチオとリミングについて)/MD さん	24 人
第 14 回	7/14	ゲーム	Sexについて(Safer Sex基準の認識・個人や場面で基準が異なることの認識)/B さん	5 人
第 15 回	8/19	ゲーム	STDって何?(STDについての知識提供・性行為とSTD感染の関係)/K さん	9 人
第 16 回	9/16	グループワーク	Safer Sex とコンドーム Part 1(コンドームと自分の SEX を見なおし・より安全なセックスは?)/HR さん	15 人
第 17 回	10/21	寸劇・グループワーク	Safer Sexとコンドーム Part 2(寸劇の場面におけるコンドームネゴシエーションを考える・コミュニケーションの取り方)/OT さん	31 人
第 18 回	11/18	講義・グループワーク	HIV について(HIV/AIDS についての基礎知識の提供・抗体検査の紹介と検査への姿勢を考える)/I さん	20 人
第 19 回	12/16	クイズ・グループワーク	STD について(STD についての情報提供・感染経路・体験談)/OJ さん	21 人
第 20 回	1/20	グループワーク	Safer Sex とコンドーム Part 1(セックスにまつわる噂の検証・自分の認識の確認)/SY さん&S さん	32 人

2)予防相談員の育成

抗体検査に併せて予防相談を行うことにより、リスク低減に向けた予防介入を行うため、MASH 東京ではクライアントセンターを基本とした予防相談員を育成している。今年度は MASH 大阪の主催した「switch2001」に5人の相談員を派遣した。また12月に新宿保健所が行った「ゲイのための HIV/STD 検査」には8人の相談員が協力した(詳細は後述)。

相談員研修は各月の相談員定例会および、各自で行っているコ・カウンセリングを基本として、鬼塚直樹氏(CAPS. UCSF)および2名の臨床心理士による指導のもと実施している。5月、6月、7月の定例会は「switch2001」での相談事例検討を行い、また1月、2月の定例会では「ゲイのための HIV/STD 検査」での相談事例検討を行っている。

11月3日、4日に新規相談員研修が行われ、新たに3名の相談員が加わった。

3)ニュースレター

「第0号」は MASH 東京の紹介に加えて、同性間性行為による感染の動向、昨年度行ったベースライン調査のまとめを掲載し、7月に行った「MASH 東京活動方針説明会」(後述)に併せて発行した。新宿2丁目のバーをはじめ、東京国際レズビアン&ゲイ映画祭で配布し、大学のサークルや各種団体にも郵送した。「第1号」は12月の「ゲイのための HIV/STD 検査」に合わせて発行し、主にこのイベントで配布した。掲載内容は、検査についての説明、および首都圏の拠点病院医師からの検査や予防に関するメッセージであった。

4)ホームページ

12月にホームページを開設し公開した。(http://mashweb.com/)これは MASH 大阪と協同で作成しており、各活動の情報案内と同時に、STD や HIV についての情報も発信している。未完成の部分が多いが、今後はさらに充実させ、逐次情報を更新していく予定である。

5)コンドーム-ユース・プロモーションプロジェクト

現在企画段階のプログラムである。コンドームの使いやすい環境を作ることと、予防啓発の資材を開発することを目的としている。コミュニティレベルの予防啓発・介入として、期間を限定した「コンドーム使用を推進するキャンペーン」を企画する。また、商業用ハッテン場等の施設を対象にしたものとして、独自の啓発ポスターやパンフレットの作成、施設利用者が携帯し易いコンドーム入り「リストポーチ」の開発を検討している。またグループレベル、もしくは個人レベルの予防啓発・介入としては、オーナーに対する講習会、もしくは個別訪問を行い、予防啓発資材の提供と共に、MSM における予防啓発への協力依頼、各施設で可能な予防策の取り組み等について意見交換し、コンドームの使いやすい環境作りを進めることを予定している。

6)新宿保健所主催「ゲイのための HIV/STD 検査」への協力

新宿保健所が主催で12月に四谷保健センターで行われたイベントである。8日に検査前相談および採血、15日に結果告知と検査後相談が行われた。その間の一週間は電話による相談を受け付けた。実施約1ヶ月前からビラによる宣伝があった。これらの実施には都内で活動をしているゲイ関連の NGO/CBO 等団体に協力の依頼があり、MASH 東京は以下の点で協力をした。次年度以降については、行政がボランティアとの協働で行う事業として、その方向性等について意見交換していきたいと考える。

(1)保健所職員へ向けたセクシュアリティ講座

MASH 東京スタッフ2名による、セクシュアリティの理解のための講座がもたれた。ゲイセクシュアリティについての総括的な話と、特に心理・カウンセリングの面について話をした。

(2)検査前調査および検査後アンケートの作成と集計分析

検査前に属性・意識・知識・行動に関する調査を、検査後に満足度・意識に関する調査を行った。また自由記載欄も設けた。集計分析結果は1月28日に行われた合同反省会において、保健所および各協力団体に公表した。

(3)ニュースレター・おみやげセットの提供

前述したニュースレター第1号やコンドーム、パンフレットを含む、おみやげセットを提供した。

(4)検査前・検査後相談員の派遣・直前研修の実施

前述したように臨床心理士を含む8人の予防相談員が MASH 東京から協力した。また事前の予防相談研修は、当日の相談を担当する保健婦と合同で行い、相談内容や情報提供の摺り合わせ、ロールプレイなどにより、MASH が実施している予防相談の共有を図った。

検査後相談は初めての試みであったが、特に問題なく実施することができた。検査前・後でのクライアン

トの心理状況の違いもあり、検査後相談についてはさらに研修を重ねることが必要である。また、ボランティアによる相談の限界、専門カウンセラーへの連携、個々のクライアントのニーズ(たとえば保険、STD 医療等)への対応など、相談員の資質、体制、配布資材等について整理していくことが望まれる。

(5) MASHROOM CAFE の設置

8 日、15 日両日の実施時間帯に合わせて「MASHROOM CAFE」を設置した。これは実質的には「ゲイのための HIV/STD 検査」からは独立して MASH 東京独自で開催したものである。基本的には検査を受けたクライアントを対象とし、くつろいだ雰囲気の中でのプレッシャーの緩和および、予防について考え、相談する場所の提供を目的とした。CAFÉ の店内(新宿区のレストランが協力)には、相談員を含む MASH スタッフが対応し、ソフトドリンクとスタッフ手作りの洋菓子が提供された。特に積極的な介入は行わないが、アートの展示や雑誌の提供に加え、ゲストを迎えてトークタイムを設け(8 日は 7 人、15 日は 3 人)それぞれの体験をもとに HIV/STD にまつわる内容の会話をもった。始終和やかな雰囲気の中で行われ、トークも強制ではなく興味のある人だけ聴ける雰囲気を作った。

結果としては受検者の約半数が利用し、利用者の反応も好評であった。

(6) 平成 13 年度 第 2 次アンケート調査

今年度も昨年度に引き続いて、新宿で行われるクラブイベントにおいて「エイズケアプロジェクト」と協働でアンケート調査を実施している。ただし今年度は 12 月に「ゲイのための HIV/STD 検査」があったため、調査期間を1月以降に移し、現在のところ 1 月 27 日に開催されたクラブイベントで約 300 の回答を得ている。今年度の調査としては 600 人の回答を目標にしている。

(7) 平成 13 年度その他の活動

1) MASH 東京活動方針説明会

年に一回ゲイコミュニティに MASH 東京の活動を公開し、意見交換の場を設けていく予定であるが、今年は第一回目でもあり、「MASH 東京活動方針説明会」を 7 月 29 日(日)16 時よりバー「K*O」さんで開催した。参加者は 18 人。メディア関係者、NGO/CBO 関係者に加え、バーの経営者の参加もあった。MASH 東京設立の経緯と活動方針の説明、スタッフの紹介を行い、その後質疑応答を行った。

C.平成14年度に向けて

現在行われているプログラムを引き続き実施すると共に、充実させることが必要である。

・MASHROOM については、常連化している参加者と、参加回数の少ない参加者それぞれに向けた内容の検討。および、出張勉強会の開発。

・予防相談については、既存の検査機関との相談事業の協働。および、医療機関外での「検査や予防に関する相談」事業の検討。

・コンドーム・ユース・プロモーションプロジェクトの展開。東京のゲイコミュニティ全体を対象にしたキャンペーン、およびハッテン場等のニーズに合わせた予防啓発資材の開発とプログラムの実施。

・ホームページやニュースレターなどの広報活動の充実。

・昨年度のベースライン調査や最近の HIV/AIDS 動向から必要とされている、若者に対する予防介入については、若者が集まりやすい場の設定、啓発の内容、啓発方法等を検討し、次年度には展開したい。

ただし、MASH 東京は人材・資金の面等において、これら全てを個別に実現するのは困難と思われ、当面はプログラムどうしの補い合い等の効率化を図る必要がある。また人材のリクルートにも力を注ぐ必要がある。

D. 発表業績

(研究論文発表)

市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、佐藤未光、井戸田一朗:MASH による啓発活動、総合臨床、第 50 巻 第 10 号、2805-2810、2001.10.1

(シンポジウム・口演)

1. 木村博和、市川誠一、他:新宿 2 丁目地区の若い MSM の HIV 予防に対する知識と行動、第 60 日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01

2. 佐藤未光、市川誠一、他:東京地域の MSM に向けた HIV/STD 感染予防活動のニーズ、第 15 回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

(サテライトシンポジウム等の企画運営)

厚生労働省HIV感染症の疫学研究班、MASH大阪、MASH東京、(財)エイズ予防財団:MSM における HIV/STD 感染とその予防に向けて、第 15 回日本エイズ学会総会サテライトシンポジウム、東京、2001.11.30(対象:日本エイズ学会会員、保健・医療・福祉従事者、NGO・CBO・NPO, 一般)

大阪地域におけるHIV/STD感染予防啓発の推進に関する研究(MASH大阪)

大阪地域におけるHIV/STD感染の予防介入

鬼塚哲郎(京都産業大学/MASH大阪)、松原　新、辻　宏幸、今井敏幸、内田待安、岡本　学、高取晶二、早川義晴、佐藤知久(MASH大阪)、日高庸晴(京都大学大学院)、鬼塚直樹(UCSF、CAPS)、木村博和(横浜市大医学部)、一居　誠、松村　実、飯沼恵子(大阪府健康福祉部感染症・難病対策課)、石原英一(大阪市保健所)、森河内麻美(大阪市環境保健局感染症対策室予防課)、大里和久(大阪府立万代診療所)、大國　剛(大國診療所)、市橋恵子(在宅看護研究センター)、日笠　聡(兵庫医科大学)、山元泰之(東京医科大学)、市川誠一(神奈川県立衛生短期大学)

研究要旨

コミュニティ・レベル(コンドーム大作戦、ニュースレター、講習会、ホームページ、ポスター配布等)、グループ・レベル(STD勉強会、Prevent Café、basement-g)、個人レベル(SWITCH・臨時検査・相談)別に介入プログラムを展開している。今年度はコンドーム什器を独自に開発し、クラブ・バーでの配布促進の試行を開始した。

また、「セクシャル・ヘルスに切り替えよう」を標語にした予防啓発イベントSWITCHは、2000年同様、5月連休にswitch2001として実施した。switch2001でのHIV/STD相談・検査(HIV、HBV、梅毒)では、受検者数は2000年(249人)の1.6倍(401人)に達した。受検者の内378人(94.3%、前年94.8%)に結果を報告し、医療機関紹介者の内83.3%が7月末時点で医療機関を受診していた。MSM(395人)の内、梅毒9.6%(TPHA及びRPR)、HBV(HBs抗原)1.5%、HIV3.3%で、ほぼ昨年同様の陽性割合であった。

A. これまでの研究の流れ

大阪地域でのHIV感染者/AIDS患者報告数は1997年以降急激に増加しており、とりわけ男性同性間の感染の増加が目立っている。比較的若年層のMSM(ゲイおよびバイセクシュアル男性)がHIV感染をはじめ多くのSTDに感染する危険にさらされている。このような状況に対し、大阪地区に集まるMSMに向けてHIV感染やSTDの感染予防について情報を発信し安全なセックスを行うよう行動変容を促すための介入プログラムを実践する一方、介入プログラムの前後に性行動調査を実施することで介入プログラムがどのような行動変容をもたらすかを検証するのがこの研究の目的である。この目的を円滑に達成するため、大阪地区のMSMを対象に予防介入プログラムとその評価を行う疫学研究者、NGO関係者および行政の三者による協働プロジェクト＜MASH大阪＞が発足した。以下、年度ごとの介入プログラムとその効果評価を概括したのちに、今年度の成果を報告する。

1. 1998(平成10)年度

行政・疫学研究者・エイズNGOスタッフのネットワークを固め、プロジェクトの名称を決定し、研究デザインのアウトラインを描き、ボランティア・リクルートを開始した。

(1) 研究デザインの作成

(2) ボランティア・リクルート

(3) コミュニティ・レベル介入プログラム

・講習会開催(2回)ボックス系ハッテン場、バーの経営者およびスタッフを対象に講習会を2回開催。

・ ポスター配布(2種)セーファーセックスを呼びかける啓発ポスターを2種開発し、バー、ハッテン場等に配布した。

2. 1999(平成11)年度

ベースライン調査を実施し、介入モデルを設定、それにそって介入プログラムを立案し実践に移した。

1) ベースライン調査

HIV関連知識/性行動に関するベースライン調査を行い、この調査の分析結果に基づいて、啓発内容を設定し、予防介入の立案・実施を行う体制を構築した。

2) 介入モデルの設定

ベースライン調査の結果に基づき、介入プログラムの内容を次のように設定した。

(1) どこで？

・バー/クラブで ←バー利用者のうち24-40%がハッテン場を利用

・ハッテン場で←セイファーセックスのニーズが高い

・インターネットで←60%が利用。10代にも発信できる

(2)誰に？
・堂山に集まる若年層のMSM、とくにHIV/STDに関する情報を避ける層に向けて
(3)何を？
・早期発見・早期治療のメリット：エイズ発症の防止効果
・STD発症とHIV感染の関連
・HIV/STD検査に関する情報
・セイファーセックスに関する情報/コンドームのイメージアップ
(4)どう介入するか？
・対コミュニティ/対グループ/対個人の3レベルを使い分けて
・エンタテイメント色を織りまぜた方法を工夫して
3)コミュニティ・レベルのプログラムの立案と実施
雑誌メディア、ホームページ、チラシなどの紙媒体もしくは コミュニティのキーパーソンを通じて、HIV/STD予防に関わるある一定量の情報を広く、浅く浸透させる方法。クライアントの行動変容を目的とするのではなく、行動変容のための環境づくりに寄与するものと位置づけられる。
・講習会開催(2回)　・ポスター配布(2種)
・コンドーム大作戦
4)グループ・レベルのプログラム
クライアント集団にプログラムを提示したうえで募集をかけ、募集に応じたクライアント達をひとつもしくは複数のグループと位置づけて実施する介入プログラムで、方法としてはワークショップ、トークショウなどがある。
・STD勉強会
平成11年8月にSTD勉強会を発足させ、以後毎月第2日曜に開催している。STDに関する、医師を交えてのカジュアルな雰囲気での情報交換の場を提供している。広報は口コミ、ポスター、カードおよびホームページ。第4回以降は参加者に対しアクセス方法と関心のあるテーマについてアンケート調査を行っている。はじめは講義形式でスタートしたが現在はテーマをあらかじめ設定したうえでのワークショップ形式を取っている。
3. 2000(平成12)年度
前年度のプログラムを継続して実施した。また、複合イベント<SWITCH2000>を企画し、府立万代診療所、大國診療所、関西HIV臨床カンファランスなどとの協働体制を構築しつつ実施した。また効果評価のためフォローアップ調査を実施した。
1)コミュニティ・レベルのプログラム
(1)コンドーム大作戦
JHC大阪支部と共同でコンドーム大作戦を展開した。バーのロゴ、セーファーセックスのメッセージ、勉強会の情報、を入れたコンドームパッケージを開発し、バー・イベントなどにおいて配布した。2000年度はのべ19の商業施設において合計2348個のSafer Sex Kitを配付した。
(2)講習会
大阪府と共同で5月1日、第4回講習会「HIV治療の現状と福祉」(講師　HIVケア・コーディネーター市橋恵子先生)を開催。参加者6名。アンケート調査を実施し、啓発パンフレット等を配布した。
(3)ニュースレター
準備号と第1号を発行した。
(4)ホームページ
平成11年12月に仮ホームページを開設し、(http://village.infoweb.ne.jp/~fwjb1409/mash/mash.html)、MASH大阪の趣旨、HIV/STD、セイファーセックス、STD勉強会についての情報を発信した。同時に本ホームページのコンテンツ制作にとりかかった。仮ホームページのヒット数は：2000/3/29の時点で1878。2001/2/10で 6461。
(5)ポスター配布
前年度に作成した2種類のポスターを配布し、セーファーセックスもしくはコンドーム使用のイメージアップをはかった。配布地域は大阪・堂山を中心に、京都、名古屋、高松へも配布した。
ポスター「つけてヤろうぜ」　17部配布　9施設
ポスター「必着」　14部配布　6施設
2)グループ・レベルのプログラム
(1)STD勉強会
MASH大阪のスタッフの中からグループ・ファシリテーターを養成中で、勉強会終了後スーパバイザーを交えてミーティングを開き、方法について検討を加えている。2000年度 に開催したSTD勉強会は全14回、のべ参加者数216名(一回平均15.4名)、うち初参加者総数56名(一回平均4名)であった。なお、主なテーマは：STDって何？/HIV陰性ってあなたにとってどういうこと？/セックスとドラッグとSTD/コンドームのつけ方/もし

あなたがHIV+だったら/セイファーセックス・ネゴシエーション。

(2) basement[g]

毎月第一金曜日、22:00～5:00、EXPLOSIONにて開催されるエイズ・ベネフィット・クラブ・パーティで2000年8月に発足した。MASH大阪がメッセージを発信するトークショウのほか、ドラッグクイーン・ショウ、GO-GO BOYSショウなどがある。2000年度は計8回開催、有料入場者総数約1,120名(一回平均140名)であった。

3)SWITCH2000

堂山に集まるMSMを対象としたHIV/STD感染予防を推進する総合イベントSWITCH2000 を企画し、HIV/STD感染の予防啓発介入と早期発見/治療を目標とする臨時の予防相談・検査(SWITCH-B)を行った。SWITCH2000の全体像は以下の通り(表1)。美術展やクラブ・イベントを含むという点のみならず、コミュニティ・レベル、グループ・レベル、個人レベルでの介入プログラムを含む点でも総合イベントであった。

表1. SWITCH2000の全体像

【イベント】		【クライアント】	【MASHの連携先】
SWITCH-A	美術展	ゲイ・コミュニティ	ボランティア
SWITCH-B	HIV/STD検査	受検者	専門職者/行政/NGO/ゲイ・メディア/ボランティア
SWITCH-C	HIV/STD講習会	バー、サウナ等のオーナー	オーナー、行政担当者
SWITCH-D	クラブ・パーティ	ゲイ・コミュニティ/HIVコミュニティ ボランティア	

SWITCH2000-Bのプログラムは以下の通りである。

(1)自記式質問票調査
(2)検査前予防相談
(3)検査のインフォームド・コンセント
(4)HIV/B型肝炎/梅毒の検査
(5)検査結果の翌日報告と検査後の相談
(6)フォローアップ電話相談

SWITCH－B参加者は251人、内検査希望は249人であった。参加者の内、セクシャリティをゲイ／バイと回答した人は96.5%、年齢は30歳未満が56.2%、30歳代が33.9%、居住地は大阪府内55%(大阪を含む近畿78.1%)、関東6.4%であった。参加者の2/3が勤務者で保健所等の検査に行きにくいと思われる層の参加が目立った。SWITCH2000の予防相談・検査を知った情報源は、ゲイ雑誌(37.1%)が最も多く、友達からの口こみ、フライヤー・チラシ・ポスターが各34%、ゲイバー等で聞いた15%で、ゲイ・ビジネスを中心にしたコミュニティから情報は伝わっていた。HIV検査は今回が初めてという人はおよそ半数にのぼった。受検の動機では感染不安(48.6%)が最も多く、人に感染させるのが心配だからも34.7%だった。受検動機に役立つ情報としては、検査前後の相談(30%)、ゲイによる相談(34%)が目立った。検査結果は236人(94.8%)に報告でき、また、HIV/ STD検査の結果から医療機関を紹介した者の内の92.6%(25人)はその医療機関を受診していた。MASH大阪以外のHIV/STD診療医師、看護婦、カウンセラーの協力を受け、受検者にとって参加しやすいゲイフレンドリーな予防相談・検査の場を提供した。検査前予防相談は、そのための講習会を受けたゲイ相談員が担当した。

4)フォローアップ調査

介入プログラムの評価に関する調査として2000年7月、MASH大阪予防介入の効果評価調査(第1回フォローアップ調査)を実施した。以下に結果概要を示した。

・MASHプログラムに参加した者、情報に触れた者は、HIV/STD関連の知識が高まり、セーファーセックスも全く使わないから使用する方へシフトするような傾向が示されていた。

・コンドームへのイメージを変え、使うことへの方向性があっても、対パートナーとの関係性から「使用することを伝える」ことの困難性が見られた。

・過去1年間のHIV抗体検査受検率は1999年調査(20.3%)に比べて2000年調査(25.9%)は5%高い割合であった。この受検率はMASH大阪への未接触群ではほぼ同率(各々、17%、19%)で、情報群はその2倍に近い30.3%と高い受検率であった。このことは、大阪の夜間検査の場所認知率が高まっていたこと、

SWITCH2000での予防相談・検査などゲイフレンドリーな環境での受検機会が提供されたことなどが影響しているものと思われる。受検機関としてSWITCH2000予防相談・検査を12.6%が利用しており、夜間／休日のエイズ検査の利用率を上回っていた。この検査のニーズがMSMに高かったことを示唆している。MASH大阪認知率が1年間で50%になった。調査対象のバイアスの点からMSM全体の認知率とは言いがたいが、極めて早い速度で認知された。

B. 2001(平成13)年度の介入プログラム

コミュニティ・レベルのコンドーム大作戦、およびグループ・レベルのSTD勉強会のプログラム内容を再検討し、プログラムの再構築を行った。switch2001はほぼ前年度のプログラムを踏襲した。

1)コミュニティ・レベルのプログラム

(1) コンドーム大作戦part2

1月4日 EXPLOSION:コンドーム・セット144個配付

1月26日 EXPLOSION:コンドーム・セット100個配付

2月1日 EXPLOSION:コンドーム・セット100個配付

(2)講習会

大阪府と共同で月日、第5回講習会「」(講師 大里先生)を開催。参加者1名。アンケート調査を実施し、啓発パンフレット等を配布した。

(3)ニュースレター

・準備号 ・第1号

(4)ホームムページ

平成12年11月にMASH東京と共同でホームページを開設し、MASH大阪・東京の趣旨、プログラムの紹介、スタッフの紹介HIV/STD、セイファーセックスについての情報を発信している。

2) グループ・レベルのプログラム

(1)STD勉強会

2001年度のSTD勉強会の実績を以下に示した。

・4月8日(日)参加者2名 スタッフ6名

テーマ:STDって何？/セイファーセックスって？/セイファーセックスネゴシエーション

・5月3・4・5日(SWITCH-E ミニSTD勉強会)

参加者39名

・6月10日 参加者2名(内初参加1名)

テーマ:STDって何？/セイファーセックスって？/セイファーセックスネゴシエーション

・7月8日

参加者2名(内初参加2名)テーマ:STDって何？

・8月12日 参加者4名(内初参加2名)

テーマ:STDって何?

'99年7月より毎月行っていた「STD勉強会」は、2001年5月のswitch2001以降、参加者数が減少した。そこで、いったん終了し、これまでのプログラムの見直しを含めた評価を行うこととした。新たなグループレベルの介入プログラムの構築のためにも、ニーズの把握と、プログラムの評価を行えるシステムを開発する必要があると考えている。スタッフからヒアリングを行い、その上で、参加層、非参加層に対し、ニーズのアセスメントを行うことを検討した。

▼評価すべき点

・開始当初、繰り返して参加した人がいたこと

・新規参加者がいたこと・参加者リクルートの方法を考えたこと

・ファシリテーションに工夫をして、会に参加する時の約束などを構築したこと

・テーマについて、STDそのものの勉強会からセーファなセックスや陽性だったらなどなど、テーマに工夫をしてきたこと、

・参加者の数や反応について観察してきたこと

・2001年のスイッチ以降に、現在のSTD勉強会の内容、リクルートに難を生じたことを感知したこと

・ニーズについて、再度検討し、新たな企画を検討することになったこと

・STD勉強会を休止し、まずスタッフからのヒアリングをしていること ・休止の期間中、Café Preventやワークショップなどの方法を試行していること

▼反省すべき点

・広報が充分に行われなかったこと

・ニーズに則していないこと(推測)

・理由がはっきりしないこと、ニーズがなんであるかが不明瞭であることが、スタッフのモティベーションの低下を招いていた。STD勉強会が、シングルセッションのワークショップ形式であったことから、能動的参加を求める場であり、参加しづらい層がありえたのではないかと考え、トークを聞くというオーディエンスの立場で参加できる場を作り、STD勉強会と比較することを目的としたの

が、Cafe Preventである。また、マルティプルセッションのワークショップを用意し、より能動的な参加を期待する層に対し、アプローチを試みることとした。これがSafer Sexワークショップである。いずれのプログラムもエイズ予防財団との共催、大阪府との協働によるものである。2002年度前期は、これらを比較検討し、ニーズをアセスメントする中で、新たなプログラムの構築を行う予定である。

(1) cafe prevent

・2001年12月9日(第1回)ゲスト:バビエノビッチ

テーマ:インスタント・セックスのイロハ参加者15名+スタッフ8名＝計23名

・2002年1月6日(第2回)

ゲスト:ブブ・ド・ラ・マドレーヌ+スライドショー＜my friend is positive＞

テーマ:欲張りなアナタとワタシ参加者12名+スタッフ9名＝計21名

・2002年2月6日(第3回) ゲスト:ハスラー・アキラ

テーマ:客と友達と恋人と参加者17名(うち初参加11名)+スタッフ10名＝計27名

(3) 3回連続STIワークショップ報告

・1月26日(日)17:30～19:00@事務所にて参加者3名。スタッフ3名 第1回テーマ「STIって何？」

(4) basement[g]

2001年度も前年度と同じプログラムで開催した。後半期からセーファーセックスのメッセージをより強く打ち出した(表2)。

表2 basement[g]の参加者数

期日	有料入場者数	活動記録
2001年 4月 6日	107名	コンドームキット100個を配付
2001年 5月 5日	約230名	SWITCH2001-Dとして実施
2001年 6月 2日	115名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年 7月 6日	163名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年 8月 3日	137名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年 9月 7日	89名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年10月 5日	73名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年11月 2日	121名	コンドームキット約50個を配付、ステッカーを配付
2001年12月 7日	135名	コンドームキット約50個を配布、ステッカーを配付
2002年 1月 4日	123名	コンドームセット約100個を配付、ステッカーを配付、GUMCCO初登場
2002年 2月 1日	114名	コンドームセット約100個を配付、ステッカーを配付

3)switch2001

大阪市堂山付近に臨時予防相談・検査会場(2会場)を設け、2001年5月3～6日(6日は結果報告のみ)に実施した。主な事業内容は、ガイダンス、感染予防に関する検査前相談、自記式質問票調査属性、検査歴など)、インフォームドコンセント、HIV、HBV、梅毒の検査、検査結果の翌日報告とカウンセリング、フォローアップ電話相談である。

・長期的目標:大阪地域のMSMにおけるセクシュアル・ヘルス(性的健康)の増進

・短期的目標:コミュニティ・レベルでの性感染症リスク低減を目標とし、イベント全体をリスク低減のための複合的予防介入プログラムと位置付ける。

・コミュニティレベルの介入プログラム

イベント全体の広報/SWITCH-A/C/D

・グループレベルの介入プログラム

ピンクベア・カフェ/STD勉強会/basement[g]

・個人レベルの介入プログラム

臨時検査昨年との主な相違点オリジナル・コンドームパッケージ展など、予防のメッセージを発信するイベントを企画した。コンサート、ライブなど、集客力のある音楽イベントを導入し、＜コミュニティのお祭り＞色をより鮮明に打ち出した。カフェを設置し、ニュートラルな交流の場を提供した。

・受検者

401人で昨年(249人)の1.6倍。正午～午後9時の受付帯で受検者の3/4が18時～21時に受検。MSM受検者(397人)の内、大阪居住者53%、他の近畿地域28.8%。ターゲット層である20歳代が57.2%を占めた。

・受検理由

「感染の可能性」、「感染不安の経験」が多く、感染不安を有する層が中心。過去1年間のHIV受検率:41%と高く、受検場所では昨年のSWITCH2000が48%と他の検査機関を超えていた。

・検査結果

MSM受検者の内、HIV、HBV、梅毒のいずれかに陽性(要治療)の者は13%、梅毒9.6%、HBV1.5%、HIV3.3%。SWITCH期間中の結果受取は380人(90%)で、医師からの説明に加え専門カウンセリングの希望が増えた。

・switch2001では、検査前予防相談を希望者に実施した。2度のSWITCHの実施により、受検者のニーズ、検査・相談・フォローアップ等を考慮した検査体制を提供することで受検動機を促進することがわかった。しかし、臨時検査は受検者への対応などのキャパシティに課題をかかえており、土/日夜間検査など、受検者のニーズに対応した検査機会が大阪に必要と考えられる。

4)フォローアップ調査

MASH大阪の予防啓発プログラムを評価するために、2001年7月に北区堂山町のクラブ(1999年、2000年調査と同じ)にて第3次アンケート調査を実施した。回答者517人、内近畿地域居住のMSM回答数は357人で、MASH大阪認知率は54.6%(昨年50%)で、20歳～39歳の層で高かった。

5) 介入プログラム以外の事業

(1)switch2001に向けた相談員研修

(2)スタッフ研修

・2001年8月18・19日、参加16名

プログラム:SWITCHの結果をどう解釈するか/コンドーム大作戦パート2をどう展開していくか/勉強会のプログラムと評価をどう練り直すか/相談事業を今後どう展開していくか

(3) 第2回アジア・エイズ専門家研修

・2001年10月19日、山西福祉記念会館301研修室/EXPLOSIONにて

プログラム:Presenting MASH-Osaka(国立結核研究所、エイズ予防財団と共同で、アジア諸国のエイズ専門家たちに対しMASH大阪が実施している介入プログラムのプレゼンテーションを行った。)

(4)switch2001中間報告会

保健医療専門家、行政等を含め、主にSWITCH-bに関わった協力者を対象に、臨時相談・検査の結果報告と振り返りをした。保健所からも参加があり、今後のMSM向けの検査について検討した。

C. 発表業績

(研究論文発表)

市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、佐藤未光、井戸田一朗:MASHによる啓発活動、総合臨床、第50巻、第10号、2805-2810、2001.10.1

(口演、シンポジウム)

1.鬼塚哲郎、市川誠一、他:大阪地域におけるMSMへのHIV/STD予防啓発のニーズとプログラム、第60回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01

2.木村博和、市川誠一、他:長か地域におけるMSMを対象とした臨時HIV/STD予防相談・検査(switch2001)の受検者の特性、第15回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

3.市川誠一、他:大阪地域のMSM向け臨時HIV/STD予防相談・検査の受検者の特性、第60回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01

4.鬼塚哲郎、市川誠一、他:MASH大阪・switch2001における臨時予防相談・検査を実施して、第15回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

5.市川誠一、他:大阪地域のMSMにおけるHIV/STD感染の予防啓発介入の評価、第15回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

6.井上洋士、市川誠一、他:大阪での臨時HIV/STD検査(MASH大阪・switch2001-B)に対する利用者の評価、第15回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

(サテライトシンポジウム等の企画運営)

1.厚生労働省HIV感染症の疫学研究班、MASH大阪、MASH東京、(財)エイズ予防財団:MSMにおけるHIV/STD感染とその予防に向けて、第15回日本エイズ学会総会サテライトシンポジウム、東京、2001.11.30

2.MASH大阪:Introduction of the project MASH-Osaka which promotes the prevention of HIV/STD infection for MSM,(平成12年度アジア地域エイズ専門家研修、大阪)

MSM 向け臨時 HIV／STD 予防相談・検査（switch2001）の受検者の特性

木村博和（横浜市大医学部公衆衛生学）、市川誠一（神奈川県立衛生短期大学）
鬼塚哲郎（京都産業大学/MASH大阪）、日高庸晴（京都大学大学院医学研究科）
鬼塚直樹（UCSF、CAPS）、松原　新、辻　宏幸、今井敏幸、岡本　学（MASH大阪）
大國　剛（大國診療所）

研究要旨

switch2001 の臨時 HIV・STD 検査・予防相談の受検者に対して，HIV 検査や性行動についての質問紙調査を実施し，受検者特性の概要を明らかにした。受検行動について 2000 年の同臨時検査での調査結果と比較したところ，2001 年の受検者では情報源としては友人が多く，ゲイ雑誌やインターネットが少なかった。受検動機としては「感染可能性」が多く，「感染不安」が比較的少なかった。受検経験では「初回受検者」と「1年以内の受検経験者」が多かった。また梅毒の検査結果と，受検動機や対象者の年齢の間に関連が認められた。

性行動について 2000 年の調査結果と比較したところ，セックスの相手男性の人数が多く，アナルセックスの実施頻度も多かった。またセックスの相手男性の人数が多いほどアナルセックスの実施頻度が多く，さらにアナルセックス実施者においては，相手男性の人数が多いほどコンドームの使用頻度が多かった。

予防に対する意識については，コンドームを使う人ほど予防のために「もっと使う」ことに積極的であり，また相手男性が少ない人ほど予防のために「相手を減らす」ことに積極的であった。

MASH 大阪の主催する STD 勉強会への参加経験とコンドームの入手頻度や使用頻度の間に関連が認められたが，臨時抗体検査の参加経験との間には関連が認められなかった。

A. 目的

2001 年 5 月に，大阪の MSM に対する HIV 予防の協働プロジェクト（MASH 大阪）が実施した，臨時 HIV／STD 検査・予防相談（switch2001）の受検者における，受検行動や予防行動，感染予防に関する知識，態度などの特性を明らかにするとともに，過去の MASH 大阪の予防プロジェクト（昨年のゲイ向け臨時 HIV／STD 検査・予防相談（SWITCH2000），MASH 大阪の主催する STD 勉強会）への参加状況により対象者を分類し，予防行動，知識，意識を比較することにより，各プロジェクトの影響について検討した。

B. 対象と方法

調査は，2001 年 5 月 3～5 日に開催された switch2001 の臨時 HIV・STD 検査予防相談の受検者 403 人を対象者として，匿名の自記式質問紙調査が行われた。当日会場にて，調査趣旨を口頭で説明し，2種類の質問紙を受検者に配布して，回答を依頼し，記入後は採血前に担当者が回収した。回収数は 399 人（99.0%）であった。2 種類の質問紙のうち一方（アンケート票）は HIV 検査に関するものであり，過去の受検経験や今回の受検動機，受検行動に対する態度，人の属性などに関する 31 の質問からなり，検査結果とリンクできるように，検体番号と同じ番号のシールを貼付した。もう一方の質問紙（セルフチェックシート票）は性行動に関するもので，過去6カ月の性行動やコンドームの使用状況，過去1年の予防行動の変化，予防に対する態度などに関する 25 の質問から構成されたが，受検者への配慮から，検査結果とはリンクできないように回収した。分析対象者は，質問の回答から MSM と判断した 397 人（98.5%，未受検者 2 人を含む）とした。アンケート票の分析は，過去の受検状況，動機，情報源，意識などについて，(1) 年齢階級（24歳以下，20 代後半，30 代，40 歳以上），(2) 居住地（大阪，大阪を除く近畿，その他），(3) HIV 検査の受検回数（初めて，2 回目，3 回目，4 回以上），(4) MASH 大阪の HIV 予防プログラム（STD 勉強会や SWITCH2000）への参加経験（居住地が大阪の人のみ），(5) 今回の HIV・STD 検査結果（STD 陽性者；HIV 陰性だが，TPHA，RPR，HBs のいずれかの陽性者．陰性者；HIV も STD も陰性だった者），(6) 受検動機（「ただ知りたい等」群；「ただ知りたい」を選び「感染可能性」を選ばなかった群，「感染可能性等」群；「感染可能性」を選び「ただ知りたい」を選ばなかった群，その他理由群；上記 2 群以外，の 3 群に分類），との関連を検討した。チェックシート票の分析は，予防行動の変化や態度について，(1) 年齢階級，(2) MASH 大阪の HIV 予防プログラム（STD 勉強会や SWITCH2000）への参加経験，(3) 経験した相手男性の人数，(4) アナルセックス時のコンドーム使用頻度，との関連について検討した。関連

の指標として，統計的検定の有意確率(p値)を利用し，p値が 0.05 未満の場合は関連があると判断し，0.05 以上 0.10 未満の場合は関連の可能性があると判断した。統計的検定としては χ^2 検定，Kruskal-Wallis の順位和検定などを使った。集計と統計的検定には，パソコン用統計解析パッケージ HALBAU for Windows Ver5.4(現代数学社，京都，2001)を利用した。

C. 結果

1. 対象者の属性

年齢は，10 代 2.5%，20 代前半 22%，20 代後半 35%，30 代前半 23%，30 代後半 10%，40 代以上 7.1%であった。自認するセクシャリティは，ゲイ 87%，バイセクシャル 10%，その他 3%であった。居住地は，大阪 53%，兵庫 14%，京都 8.3%，東京 5.5%，滋賀 4.0%，奈良 2.3%，岡山 1.5%，その他 11%であり，大阪を含む近畿の合計は 82%であった。これまでの MASH 大阪の HIV 予防プログラムへの参加状況(MASH 大阪体験度)は，昨年の SWITCH2000 (臨時 HIV／STD 検査・予防相談以外のイベント参加者を含む)の参加経験者 25%，MASH 大阪の STD 勉強会の参加経験者 13%，このうち両方の参加経験者 8%(32 人)であり，これまでにまったく MASH 大阪にかかわりを持ったことのない人は 70%であった。昨年の SWITCH2000 での受検者調査の結果と比較しても，属性に明らかな違いは認められなかった(20 代;54%→57%，30 代;34%→33%，大阪;55%→53%，大阪除く近畿;23%→29%，ゲイ・バイセクシャル;97%→97%)。

2. 対象者の HIV 検査に関する特性

<u>switch2001 に関する情報源</u>

switch2001 の情報源としての各メディアの利用状況は(複数回答可)，「お友達から」43%，「フライヤー，チラシ，ポスターを見て」41%，「ゲイ雑誌で」23%(BADi17%，G-men7%)，「ゲイバーの人から」18%，「インターネットで」7.6%，「恋人やボーイフレンドから」7.3%，「ハッテン場で聞いた」1.0%の順であった。2000 年の調査結果と比較して，「お友達」と「フライヤー等」が増加し(34%→43%，34%→41%)，「ゲイ雑誌」と「インターネット」が減少していた(37%→23%，13%→7.6%)。SWITCH2000 参加経験の有無別でみると(図1)，「経験あり」群では「フライヤー等」，「ゲイ雑誌」(p=0.00029)，「インターネット」(p=0.05696)が多く，「お友達」(p=0.01431)が少なかった。2000年の調査結果と比較すると，「経験あり」群では「フライヤー等」が多かったが，「経験なし」群では，「お友達」，「ゲイバーの人」が増加し，「ゲイ雑誌」や「インターネット」が少なかった。

<u>HIV・STD 検査の受検動機</u>

受検動機は(複数回答可)，「ただ単に知りたいから」46%，「自分も感染する可能性があるから」45%，「感染したかもと，不安になったことがあるから」38%，「ほかの人に感染させる心配があるから(うつす心配)」32%，「新しい恋人，ボーイフレンドができたから」15%，「恋人，ボーイフレンドと一緒に受検するから」8.1%，「気になる体調の変化があったから」7.8%の順であった。2000 年の調査結果と比較すると，「感染の可能性があるから」，「新しい恋人ができたから」が増加し(39%→45%，7.6%→15%)，「感染不安の経験から」，「うつす心配から」が減少していた(48%→38%，35%→32%)。SWITCH2000 参加経験別にみると(図2)，「経験あり」群では「感染可能性から」，「新しい恋人等ができたから」が多く，「経験なし」群では「ただ知りたいから」が多かった。検査結果別にみると(近畿圏居住者に限定)，「感染可能性から」は陰性者で41%，STD 陽性者で 58%，HIV 陽性者で 80%と，差異が認められた(p=0.01390)。

<u>HIV 検査の受検経験</u>

分析対象者のうち HIV 抗体検査を初めて受検した人は 44%，1 年以上受検していなかった人 16%，1 年以内に受検した人 41%であった。2000年の受検者と比較して，初回受検者の割合はやや減少傾向がみられたが(48%→44%)，1 年以上受検していなかった人の割合は 12 ポイント減少していた(28%→16%)。昨年の SWITCH2000 の参加経験別にみると(図3)，「参加経験なし」297 人のうち，初回受検者は 58%，1 年以上受検していなかった人 20%，1 年以内に受検した人 23%であり，2000年の調査結果と比較して，初回受検者と 1 年以内の受検経験者の割合が多かった(48%→58%，9.6%→23%)。過去 1 年以内の受検経験者 161 人の受検場所は，SWITCH2000 が 48%，保健所 37%，夜間・休日検査 12%，病院・医院 11%，東京都南新宿検査相談室3.1%であり，1年以内の受検場所数が1カ所の者 36%，2 カ所以上 4.5%であった。SWITCH2000 の参加経験別にみると(図4)，「参加経験なし」群の受検場所は，保健所 58%，病院・医院 19%，夜間・休

日検査 18%，南新宿 7.5%であり，2000年の調査結果と比較して保健所と南新宿の経験が増加し(42%→58%，1.7%→7.5%)，夜間・休日検査や病院・医院が減少していた(30%→18%，25%→19%)。

HIV・STD 検査の陽性者割合

分析対象者の梅毒 TPHA 検査の陽性者割合は16%，梅毒 RPR 検査の陽性者割合 9.6%，HBs 抗原の陽性者割合 1.5%，HBs 抗体の陽性者割合 18%，HIV 陽性割合 3.3%であった。昨年の SWITCH2000 の参加経験別にみても，明らかな差異は認められなかった(梅毒 TPHA：13 VS 17%，梅毒 RPR：7.0 VS 11%，HBs 抗原：1.0 VS 1.7%，HBs 抗体 20 VS17%，HIV：4.0 VS 3.1%)。年齢別にみると(図5)，TPHA 陽性者割合は，24 歳以下 11%，20 代後半 13%，30 代 18%，40 歳以上 36%と，40 歳以上に多く(p=0.01047)，TPHA 価も 40 歳以上で高値であった(p=0.01946)。受検動機による 3 分類別にみると(近畿圏居住者に限定)，TPHA 陽性者割合は(図6)，「ただ知りたいから」他群11%，「その他の理由」群 16%，「感染可能性から」他群 24%と，「感染可能性から」他群で多い傾向にあり(p=0.05001)，TPHA 価も「感染可能性から」他群で高い傾向にあった(p=0.05356)。また，RPR 陽性者割合は，「ただ知りたいから等」群 6.4%，「その他の理由」群 7.7%，「感染可能性から等」群 17%と，「感染可能性から等」群で多く(p=0.02526)，RPR 価も「感染可能性から等」群で高値であった(p=0.02245)。さらに，HIV 陽性者割合は，「ただ知りたいから等」群 0%，「その他の理由」群 3.5%，「感染可能性から等」群 5.7%と，「感染可能性から等」群で多い傾向にあった(p=0.07680)。

switch2001 の受検者数の動向

受検者全体の動向は，初日(5 月 3 日)47%，2 日目(5 月 4 日)31%，3 日目(5 月 5 日)21%であり，特に初日の夕方と夜間(15～18 時 18%と 18～21 時 15%)に集中していた。逆に 2 日目，3 日目の午後(12～15 時は 5%，6%)は閑散としていた。

HIV 検査の受検を希望する曜日・時間帯

分析対象者が HIV 検査の受検を希望する曜日(複数回答可)は，日曜日 50%，土曜日 39%，月～金曜日 24%の順であり，時間帯(複数回答)は，午後(13～17 時)42%，夜間(17～20 時)40%が多かった。さらに細かく分類すると，「日曜日の午後・夜間」30%，「土曜日の午後・夜間」19%，「平日の午後・夜間」17%，「土日の午後・夜間」11%であった。

HIV 検査の受検のきっかけとなること

HIV 検査に関する要件や情報を 16 項目ほど掲げ，それが回答者にとって HIV 検査を受検する「きっかけ」となるか否かを質問した。「きっかけ」になるの回答が多かったのは，①「プライバシーが守られている」93.2%，②「無料である」92.2%，③「予約の必要がない」90.7%，④「検査結果が翌日に分かる」87.9%，⑤「本名を名のる必要がない」86.1%，⑥「複数の STD 検査と一緒に受けられる」85.9%，⑦「早期発見のメリットについての情報」82.9%，⑧「陽性だったときのアフターケアの情報」82.6%，⑨「休日(10～12 時，13～15 時)に受付をしている」79.8%，⑩「ゲイの人でエイズなどの質問に答えてくれたり，相談できる人がいる」78.3%，⑩「感染時の初期症状についての情報」78.3%，⑫「平日に夜 8 時まで受付をしている」76.1%などの順であった。

疾病・検査所の認知状況

HIV 検査と一緒に検査した B 型肝炎と梅毒について，知っているか否かを質問した。また保健所の HIV 検査が無料・匿名であることや，大阪の夜間検査所の所在地についても知っているか質問した。B 型肝炎については72%が，梅毒では75%が知っていると回答した。保健所の無料・匿名検査については 78%が知っていると回答したが，夜間検査所の場所を知っていたのは45%に留まった。年齢階級別に認知状況をみると，B型肝炎では 24 歳以下 60%，20 代後半 74%，30 代 79%，40 歳以上 75%であり，若い世代での認知が低かった(p=0.00543)。また梅毒も 24 歳以下 65%，20 代後半 73%，30 代 83%，40 歳以上 89%と，若い世代での認知度が低かった(p=0.00340)。3. 対象者の性・予防行動における特性

過去 6 カ月間の性行動

対象者のうち，過去 6 カ月間に男性とセックスした人は 97%，相手男性の人数は，「1 人だけ」15%，「2 人だけ」11%，「3～5 人」33%，「6～10 人」15%，「11～20 人」13%，「21 人以上」9.3%であった。SWITCH2000 の参加経験別にみると(図7)，「参加経験あり」群の方が相手人数が多かった(p=0.04661)。また昨年の調査結果と比較すると，「1 人だけ」の割合が少なく，「6 人以上」の割合が多かった。とくに「参加経験あり」群でこの差が大きかった(20%→11%，33%→46%)。過去 6 カ月間に行

った性行為にみると，「フェラチオされた」92%，「フェラチオした」90%，「アナルセックス(タチのみ)」23%，「アナルセックス(ウケのみ)」17%，「アナルセックス(タチ・ウケともにあり)」35%，「アナルセックスはしていない」21%であった。また，2000年の調査結果と比較すると，男性とセックスした人の割合の増加に伴い(91%→97%)，フェラチオ，アナルセックス・タチ，アナルセックス・ウケの頻度は，いずれも増加していた(83%→91%，43%→58%，46%→52%)。特にSWITCH2000の「参加経験あり」の受検者，つまり2年連続の受検者でのアナルセックス・タチの増加が大きかった(43%→66%，図8)。相手男性の人数と性行為経験との関係についてみると(図9)，フェラチオの頻度は相手人数によっても違いが認められなかったが，アナルセックスについてみると，アナル(タチ)ありの割合は，相手男性の人数「1～2 人」群47%，「3～5 人」群 55%，「6 人以上」群 82%(p<0.00001)と，相手人数が多い人ほど実行者が多く，アナル(ウケ)ありの割合も，「1～2 人」43%，「3～5人」52%，「6人以上」70%と(p=0.00014)，同様の結果であった。

コンドーム使用頻度

性行為別にコンドームの使用状況をみると(図10)，「必ず使った」人の割合は「フェラチオされた」とき0.8%，「フェラチオした」とき0.8%，「アナルセックス・タチ」のとき38%，「アナルセックス・ウケ」のとき36%であった。逆にコンドームを「まったく使わなかった」人の割合は，「フェラチオされた」とき78%，「フェラチオした」とき75%，「アナルセックス・タチ」のとき15%(全体の 9.6%)，「アナルセックス・ウケ」のとき 13%(同7.6%)であった。アナルセックスのタチ時のコンドーム使用頻度と，ウケ時の使用頻度の関係をみると，互いによく相関していた(Spearman の順位相関係数 r_s=0.705, p<0.00001)。2000年の調査結果と比較して，「必ず使った」人の割合は，フェラチオ，アナルセックス・タチ，アナルセックス・ウケと，まったく変わらなかった(2.5%→0.8%，38%→38%，37%→36%)。「まったく使わなかった」人の割合は，アナルセックス・タチではほとんど変わらなかったが，アナルセックス・ウケでは減少し，フェラチオでは増加していた(13%→15%，21%→13%，64%→78%)。SWITCH2000の参加経験別にみると，「参加経験あり」群と「参加経験なし」群のアナルセックス時の「必ず使った」人の割合にほとんど差異は認められず(タチ;39 vs 38%，ウケ;34 vs 36%)，「まったく使わなかった」人の割合はむしろ「参加経験あり」群に多い傾向が認められた(タチ;16 vs 14%，ウケ;15 vs 12s%)。相手人数別にコンドームの使用頻度をみると，アナルセックス・タチでの「必ず使った」人の割合は，相手男性の人数「1～2 人」24%，「3～5 人」41%，「6 人以上」42%であり(p=0.01205)，またアナルセックス・ウケでも(図11)，「1～2 人」27%，「3～5人」35%，「6人以上」40%と(p=0.00490)，相手人数が多い人ほど「必ず使った」人の割合が多く，逆に相手人数が少ない人ほど「まったく使わなかった」人と「無回答」の割合が多かった。

予防に対する意識

性感染症を予防するために有効だといわれる方法(①セックスの相手の数を減らす，②コンドームをもっと使う，③お酒やドラッグの量を減らす)に対して，対象者がどのように考えるかを質問した。各方法について「努力してやり遂げようと思う」と回答した人の割合は，「相手をへらす」25%，「もっと使う」63%，「酒・薬をへらす」35%であった。逆に，「そういう必要はないと思うし，やりたくない」人の割合は，「相手をへらす」15%，「もっと使う」1.8%，「酒・薬をへらす」14%であった。ただし「酒・薬をへらす」については，「その他」，「無回答」の合計が21%を占めていた。2000年の調査結果と比較すると，各予防方法に「やり遂げたい」と回答した割合では，「相手をへらす」(22%→25%)，「コンドームをもっと使う」(53%→63%)，「酒・ドラッグをへらす」(30%→35%)と，コンドーム使用に積極的な人の割合が増加していた。しかし「必要ない・やりたくない」の割合は，「相手をへらす」(15%→15%)，「コンドームをもっと使う」(2.1%→1.8%)，「酒・ドラッグをへらす」(12%→14%)と，まったく変化していなかった。相手人数別に各方法に対する意識をみると，「相手をへらす」での「やり遂げたい」人の割合は(図12)，相手男性の人数「1～2 人」では 51%，「3～5人」19%，「6 人以上」15%と，相手人数が少ない人で，減らしたいと回答した人が多かった(p<0.00001)。「コンドームをもっと使う」での「やり遂げたい」人の割合は，相手人数「1～2 人」では 66%，「3～5 人」57%，「6 人以上」71%と，「3～5 人」で少なかった(p=0.04587)。コンドーム使用頻度別(アナルセックス・ウケ)に，「コンドームをもっと使う」に対する意識をみると(図13)，「やり遂げたい」人の割合は，「全く使わなかった」人で 27%，「ほとんど・使わないことが多

かった」人50%,「五分五分で使った」人76%,「わりと・ほとんど使った」人85%,「必ず使った」人87%であり,使っている人ほどより使っていこうとする態度が強く認められた(p=0.00005)。4. MASH 大阪体験度別にみた受検者の特性MASH大阪が過去に実施した予防プログラム(2000年5月のHIV/STD予防相談・検査 SWITCH2000, MASH 大阪の主催するSTD 勉強会)への参加経験別に対象者を分類し(①両プログラムへの参加経験なし,②SWITCH2000のみ,④STD勉強会のみ,④両プログラムともあり),予防行動やその意識について比較,検討した。予防行動については,性行為時のコンドーム使用状況と予防行動の変化について検討した。予防行動の変化については,1 年前との頻度の変化を,①情報のチェック,②コンドーム入手,③コンドーム以外の予防の工夫,④コンドーム使用,⑤相手への使用依頼,⑥ハッテン場での使用頻度,⑦コンドームなしでの射精頻度など16問の回答(少なくなった,変わらなかった,多くなった)を,MASH 大阪体験度別に比較,検討した。1 年前と比較した「コンドーム入手」頻度の変化について MASH 大阪体験度別にみると(図15),「増加した」と回答した人の割合は,「両経験なし」群27%,「SWITCH のみ」群31%,「勉強会のみ」群46%,「両方経験あり」群 87%と,STD 勉強会の参加経験者では多かった(p=0.00068)。その他の予防行動については,1 年前と比較した行動の変化についてMASH大阪体験度別にみても,「勉強会参加経験者」でやや予防的な傾向がみられた事項もあったものの,明らかな差異が認められたものはなかった。コンドーム使用頻度について MASH 大阪体験度別にみると(図16),アナルセックス・タチ時にコンドームを「必ず使った」と回答した人の割合は,「両経験なし」群39%,「SWITCH のみ」群39%,「勉強会のみ」群73%,「両方経験あり」群52%と,行動変化について比較した場合と同様,勉強会の参加経験者での使用頻度が多かった(p=0.00950)。予防のため「コンドームをもっと使う」ことに対する意識ついて MASH 大阪体験度別にみると(図17),「やり遂げたい」と回答した人の割合は,「両経験なし」群65%,「SWITCH のみ」群55%,「勉強会のみ」群57%,「両方経験あり」群68%と,「両経験なし」群と「両経験あり」群にほとんど差異を認めなかった。それどころか単一のプログラムの参加経験のみの群では,上記 2 群よりも「やり遂げたい」がやや少ない傾向を示していた。これらより MASH 大阪の予防プログラムの参加経験と,予防行動や意識との関連についてみると,コンドーム入手の変化や使用頻度と STD 勉強会への参加経験との関連など,ごく一部にはその関連が認められるものの,SWITCH のみの参加経験と予防行動や意識との関連や,予防意識と両プログラムへの参加経験との関連は,今回のデータからは認められなかった。考察保健所やその他検査機関が実施する HIV 検査の受検者の特性については,性別,年齢階級,受検回数別の受検者数などの限られた情報しか明らかにされていない。特に受検者の性的指向について情報を収集している検査機関はきわめて限られているため,MSM受検者の受検行動や予防行動,意識についての資料は,2000年HIV社会疫学研究班MSMグループがMASH大阪と実施したゲイ向けの臨時HIV/STD 検査・予防相談(SWITCH2000)の受検者について分析した報告とM検査機関の受検者数とその陽性者割合の年次推移についての報告などに限られる。したがって今回の臨時 HIV/STD 検査・予防相談(switch2001)の受検者の受検行動や予防行動などの動向について明らかにすることは,今後の MSM に対する検査体制のあり方を検討する際の貴重な資料の一つになるであろう。ただ本研究の対象者における行動や意識が,保健所などの既存の検査機関を利用する MSM のものと一致するとは限らず,今回の調査結果からMSMの受検者層全体やMSM全体の行動や意識について論ずるのは困難であろう。今回の調査した対象者の受検行動についてみると,受検動機と梅毒の検査結果との間に関連が認められた。これは,対象者を選択した受検動機(複数回答可)の組み合わせにより,「ただ単に知りたいから」を選び「自分も感染する可能性があるから」を選ばなかった群(単に知りたいから等群),「ただ単に知りたいから」を選ばず「自分も感染する可能性があるから」を選んだ群(感染可能性等群),その他の群の3群に分類し,梅毒検査の陽性者割合を3群間で比較すると,「感染可能性等」群の割合がほか2群の割合よりも高率である,というものであった。このような差がみられた理由としては HIV 検査の受検者のうち,自身の感染の可能性を認識して受検する人には,感染リスクの高い行為を,自覚しながらも,行っている人が多いことが理由なのかもしれない。ただ今回の調査では検査結果と性行動や予防行動の情報を,各々の受検者ごとにリンクさせなかったので,コンドーム使用頻度

と検査結果との関係について，直接，検討できないため，検査結果と受検動機，コンドーム使用頻度などとの関連や，自身の感染可能性と性行動や予防行動との関連について検討することができなかった。今後，MSM を対象とした予防啓発のための，より効果的な情報やサービスを提供するためには，受検行動や性行動・予防行動，検査結果について調査，検討していく必要があるであろう。

D.まとめ

SWITCH2001 の臨時 HIV・STD 検査・予防相談の受検者に対して，HIV 検査や性行動についての質問紙調査を実施し，受検者特性の概要を明らかにした。受検行動について2000年の調査結果と比較したところ，情報源では友人が多く，ゲイ雑誌やインターネットが少なかった。受検動機では「感染可能性」が多く，「感染不安」が比較的少なかった。受検経験では「初回受検者」と「1年以内の受検経験者」が多かった。また梅毒の検査結果と受検動機の間に関連が認められた。性行動について 2000 年の調査結果と比較したところ，セックスの相手男性の人数が多く，アナルセックスの実施頻度も多かった。またセックスの相手男性の人数が多いほどアナルセックスの実施頻度が多く，さらにアナルセックス実施者についてみると，相手男性の人数が多いほどコンドームの使用頻度が多かった。予防に対する意識については，コンドームを使う人ほど予防のために「もっと使う」ことに積極的であり，また相手男性が少ない人ほど予防のために「相手を減らす」ことに積極的であった。MASH 大阪の主催する STD 勉強会への参加経験とコンドームの入手頻度や使用頻度の間に関連が認められたが，臨時抗体検査の参加経験との間には関連が認められなかった。

E. 発表業績

（研究論文発表）

1. 市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、佐藤未光、井戸田一朗：MASHによる啓発活動、総合臨床、第 50 巻 第 10 号、2805-2810、2001.10.1

（シンポジウム・口演）

1. Onitsuka,T . Matsubara, A. Tsuji, H. Satoh, T. Kimura, H. Onizuka, N. Ichikawa, S. : Analysis on MASH-Osaka Project – the first HIV prevention intevention project in Japan, The 6th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, Melbourne, 2001.10.8
2. 木村博和、市川誠一、他：新宿 2 丁目地区の若い MSM の HIV 予防に対する知識と行動、第 60 回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01
3. 市川誠一、他：大阪地域の MSM 向け臨時 HIV／STD 予防相談・検査の受検者の特性、第 60 回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01
4. 鬼塚哲郎、市川誠一、他：大阪地域における MSM への HIV/STD 予防啓発のニーズとプログラム、第 60 回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01
5. 木村博和、市川誠一、他：大阪地域における MSM を対象とした臨時 HIV/STD 予防相談・検査 (Switch2001)の受検者の特性、第15回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01
6. 鬼塚哲郎、市川誠一、他：MASH 大阪・Switch2001 における臨時予防相談・検査を実施して、第 15 回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01
7. 佐藤未光、市川誠一、他：東京地域の MSM に向けた HIV/STD 感染予防活動のニーズ、第 15 回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01
8. 市川誠一、他：大阪地域の MSM における HIV・STD 感染の予防啓発介入研究. 2.第 2 次質問紙調査 (2000 年調査)による予防介入の評価、第 15 回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

（サテライトシンポジウム等の企画運営）

1. 厚生労働省 HIV 感染症の疫学研究班、MASH 大阪、MASH 東京、(財)エイズ予防財団：MSM における HIV/STD 感染とその予防に向けて、第15回日本エイズ学会総会サテライトシンポジウム、東京、2001.11.30（対象：日本エイズ学会会員、保健・医療・福祉従事者、NGO・CBO・NPO、一般）

図1. SWITCH2001についての情報源

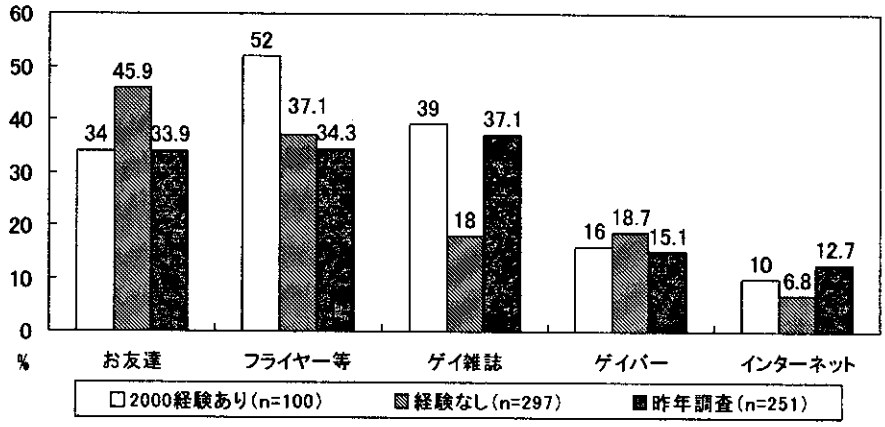

図2. HIV・STD検査の受検動機

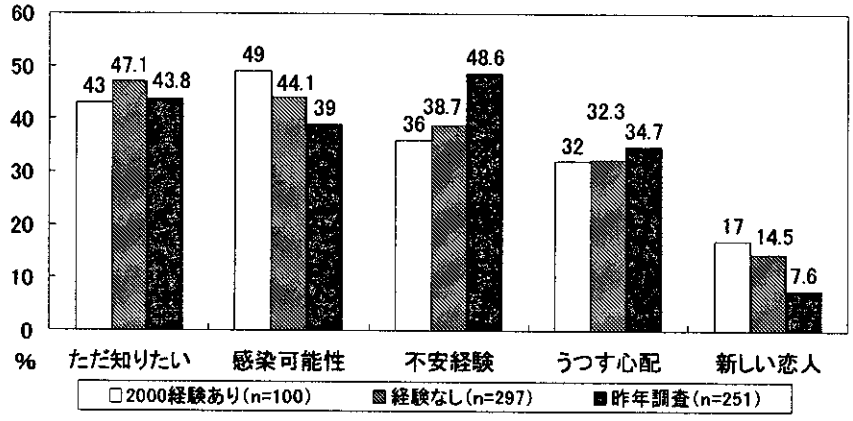

図3. HIV検査の受検経験

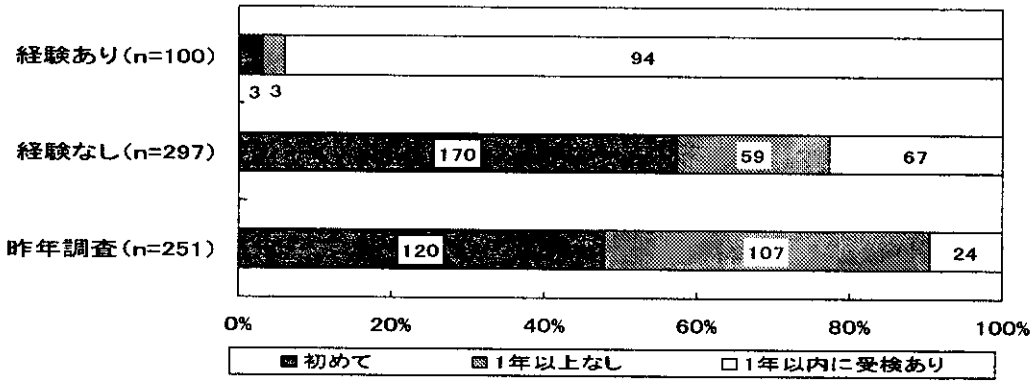

図4. 1年以内の受検場所

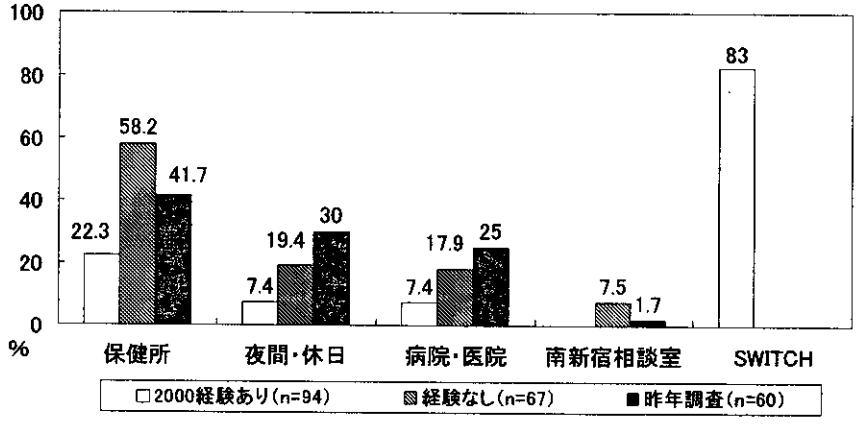

図5. 年齢別にみた検査陽性者の割合

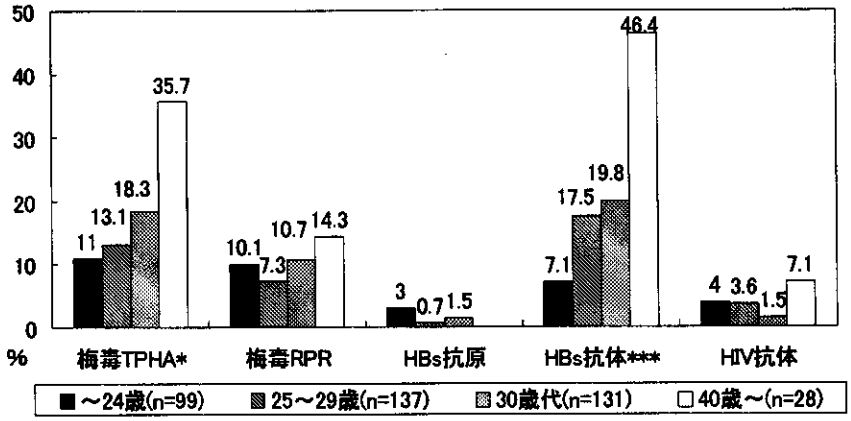

図6. 受検動機別にみた検査陽性者の割合

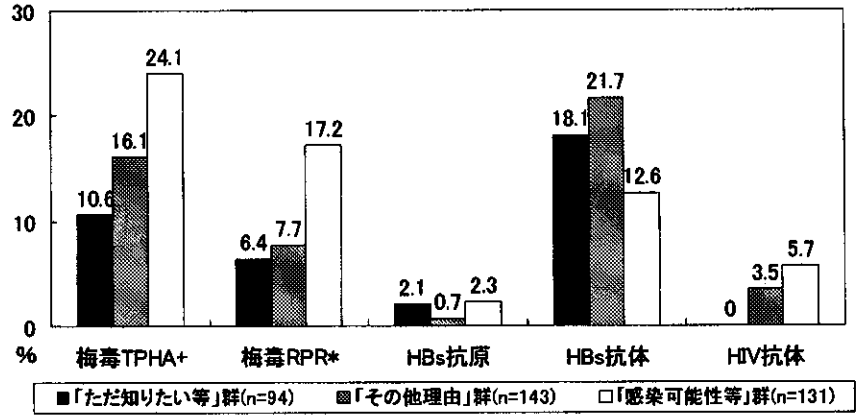

図7. 過去6ヶ月間のセックス相手男性の人数

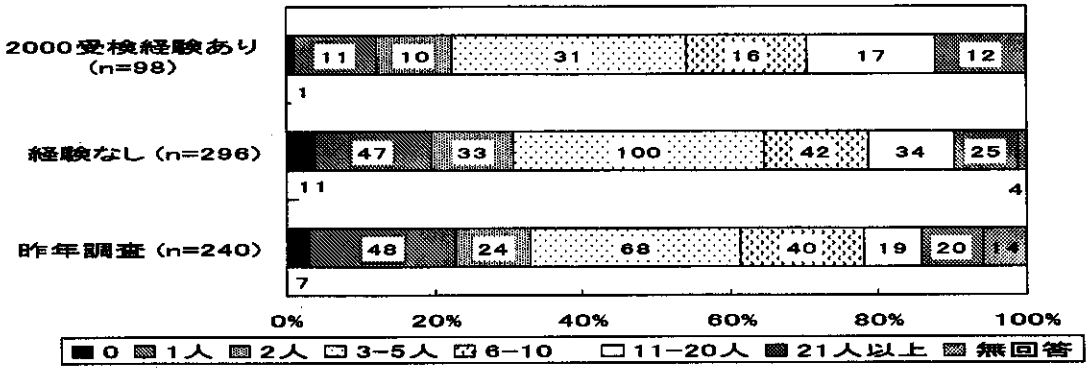

図8. SWITCH2000参加経験別の性行為頻度

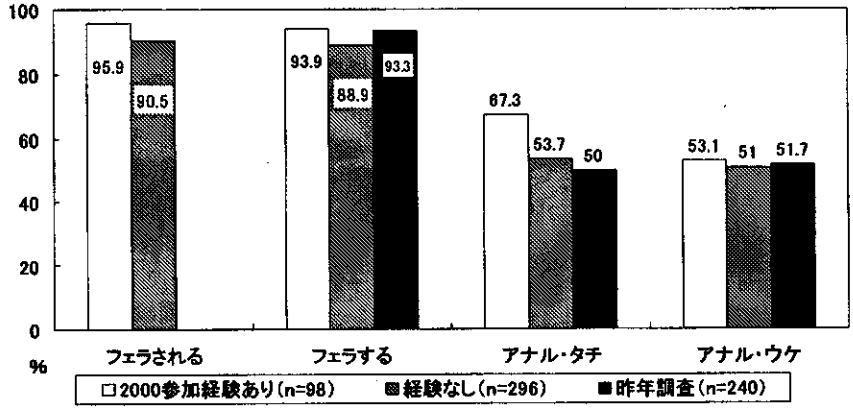

図9. 相手人数別にみた各性行為の頻度

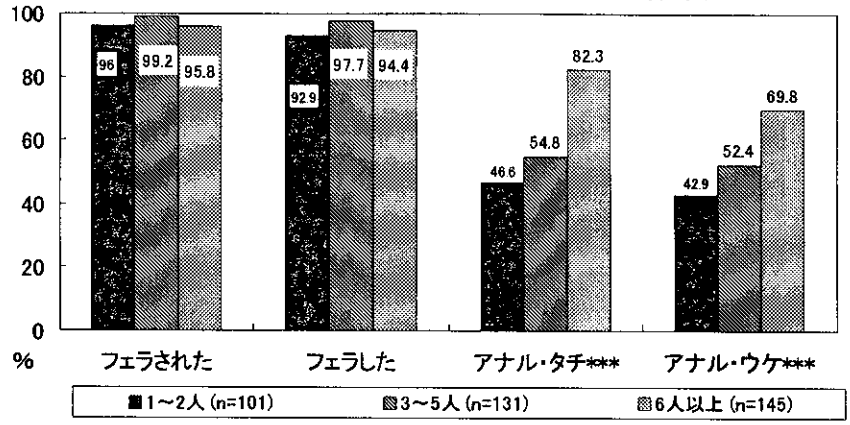

図10. 性行為別のコンドーム使用頻度

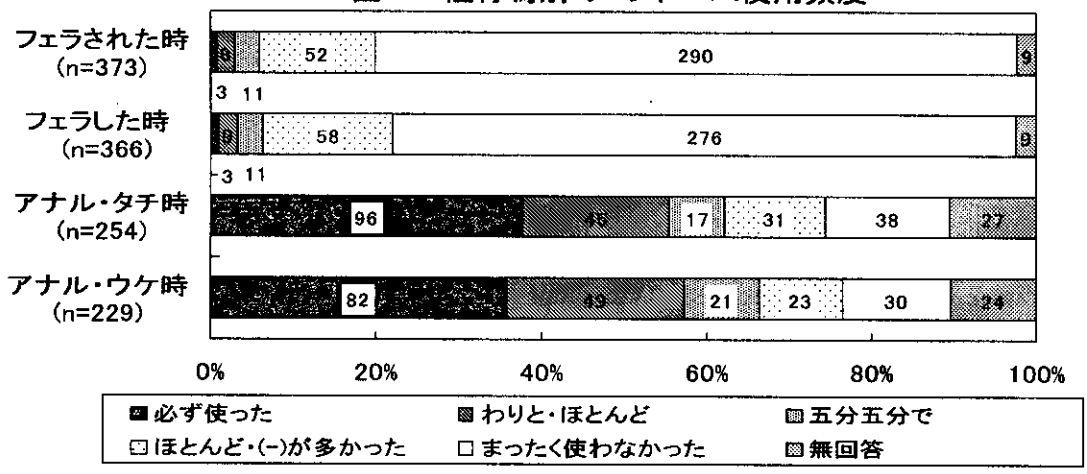

図11. 相手人数別のタチ時コンドーム使用頻度

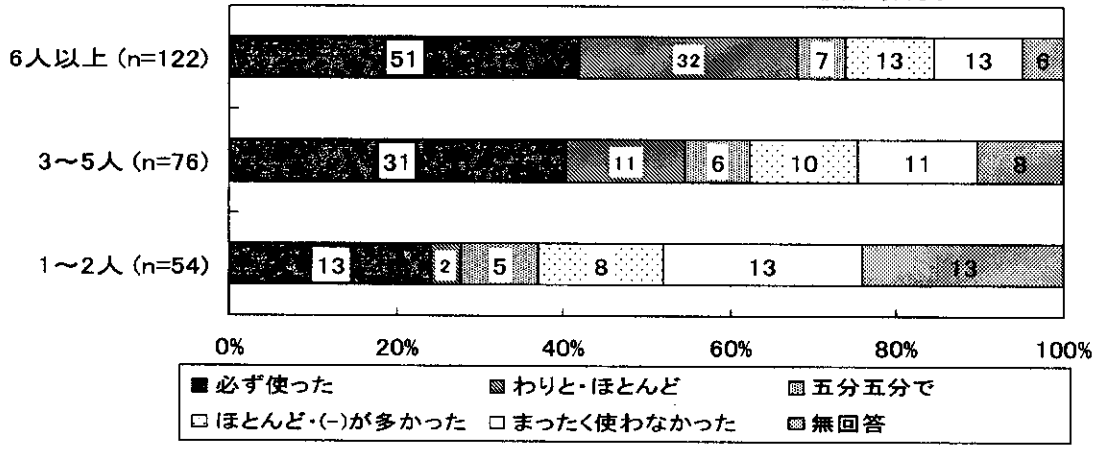

図12. 相手人数別の「相手を減らす」ことへの意識

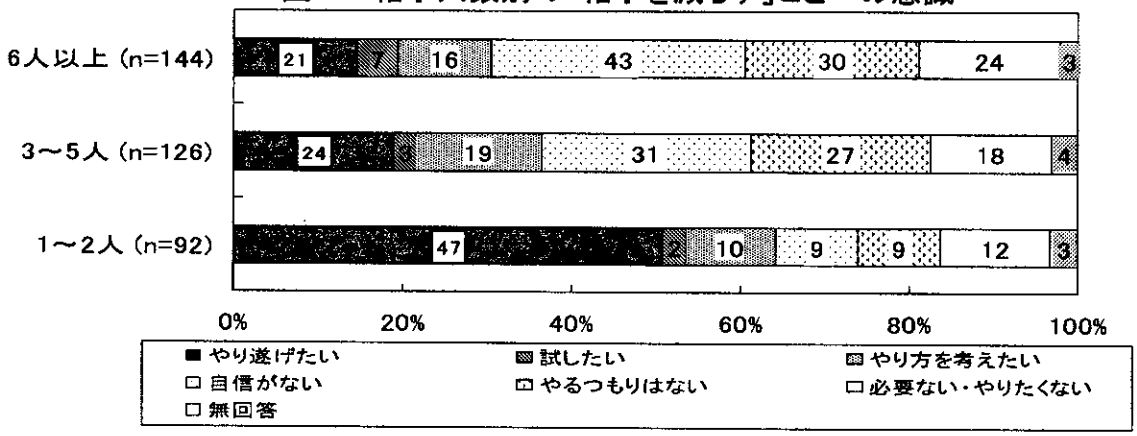

図13. 相手人数別にみた「コンドームをもっと使う」ことへの意識

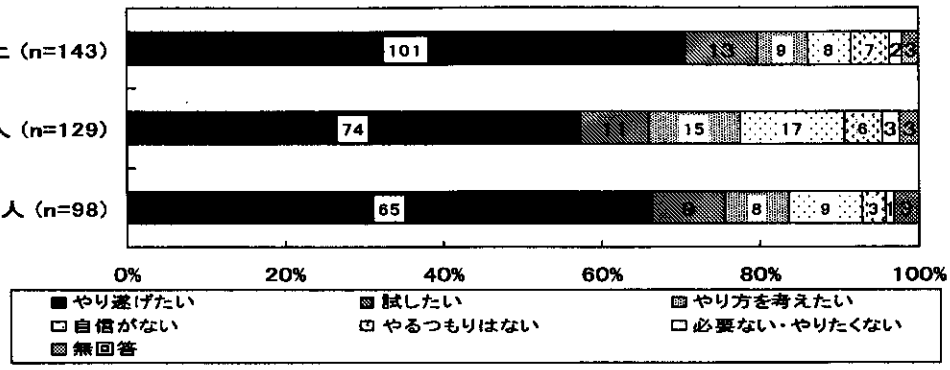

図14. タチ時のコンドーム使用頻度別にみた「もっと使う」ことへの意識

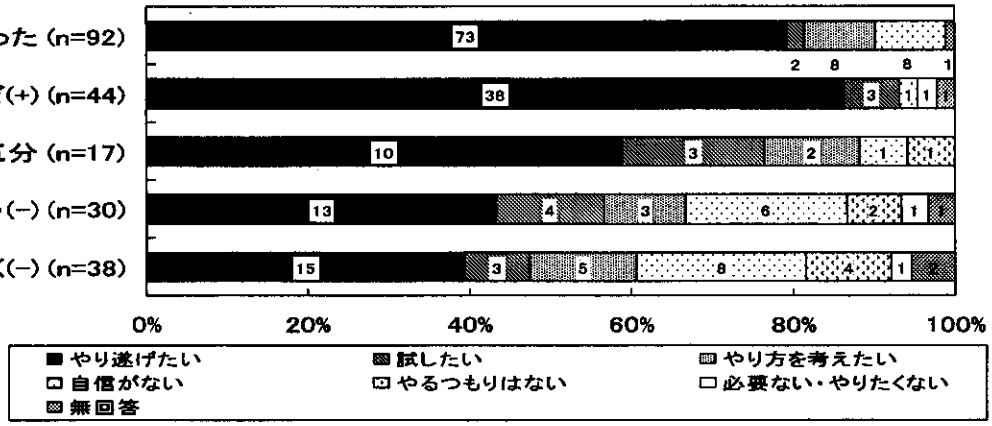

図15. 過去1年間に「コンドームを入手する」頻度は？

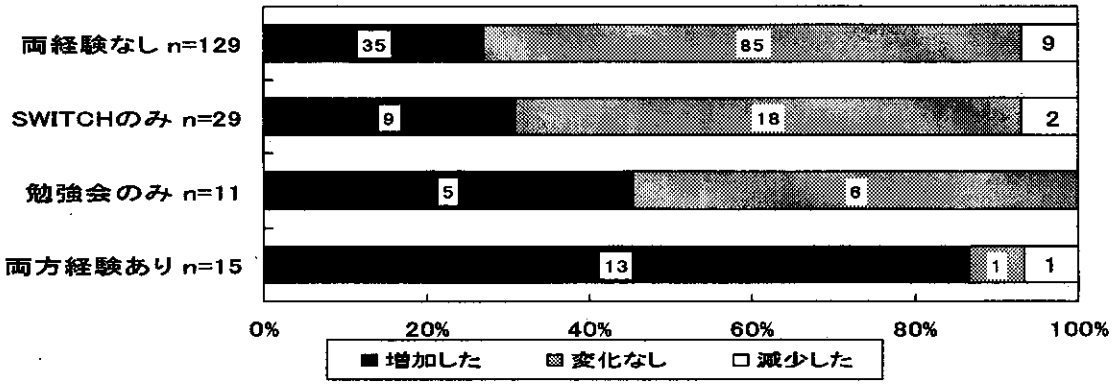
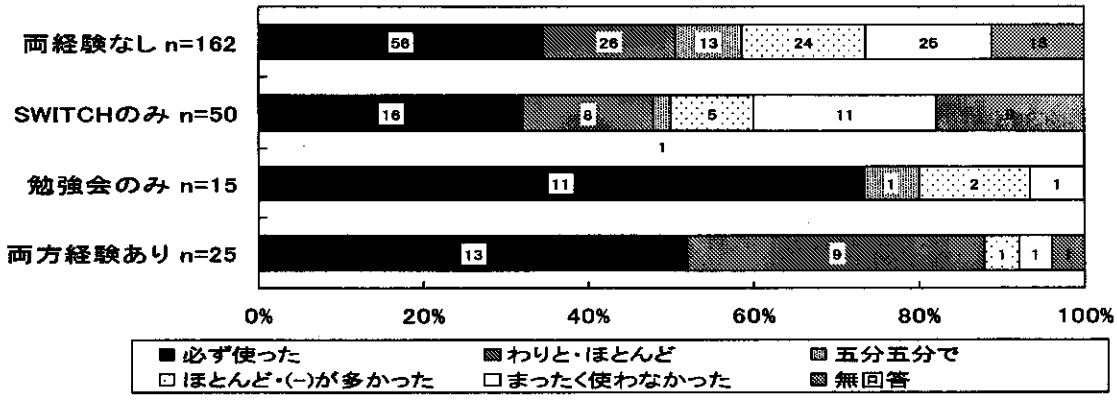
図16. MASH大阪体験度別にみたタチ時のコンドーム使用頻度